

# 国語

(全14ページ)

## 注意事項

- 一 受験番号、氏名および解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 二 問題用紙に解答を書き込んでも採点されません。
- 三 字数制限の設問については、特別な指示がない限りは、、や「などの記号を字数に含めません。

例

こ	こ	が	、	「	私	の	母	校	」	と	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(計十四字)

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章A】

「批判」にあたる欧語、たとえばドイツ語の *Kritik* や英語の *criticism* は、古代ギリシア語の「クリネイン（ふるいにかける、分ける、裁判する）」や、ラテン語の *cernerecret-*（区別する、選り分ける）に由来し、否定的な批判だけではなく、事柄を整理して批評することや評論することといった意味も保持している（シツプリー英語語源辞典、独和大辞典第二版）。

A、哲学者カント（一七二四—一八〇四）の主著のタイトルである『純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*)』は、理性能力のある種の限界をよく吟味して画定する、といった意味であって、「批判」ということで単純な攻撃や非難といったものを指しているわけではない。また、日本語の「批判」も元々は、批評して判断することや、物事を判定・評価すること、良し悪しや可否について論ずることなどを意味していた（日本国語大辞典第二版）。

B、いつの頃からか、「批判」がこの国で常に否定的なニュアンスを帯びるようになったのも確かだ。この言葉をめぐる現在の状況は、その傾向がさらに強まり、極端になった結果だとも解釈できる。

日本の社会は同調圧力が強く、空気を読むことが推奨される風潮が強い、とはよく指摘されるところだが、C、批判的検討が必要な場面でも、相互的な「甘え」や「お約束」がその場のコミュニケーション

ンを覆ってしまうケースがあまりに多い。和を少しでもミダす言葉——批判（批評、吟味）的な要素のある言葉——に皆が敏感になり、その場のノリに合わない言葉を発しづらくなるケースだ。

まして、そうした同調の空気が支配するケースでは、相手の主張に対して明確に否定的な意見や疑問を向けることは強く憚られるようになる。言うなれば、互いになさき合う同調的な言葉の空間と、その空間全体に向けられる容赦のない厳しい言葉、その中間領域が存在しなくなるのだ。この種の状況がコミュニケーションの多くを占めてしまえば、「批判」の言葉はますます刺々しく、敵意をもつたものとしてのみ機能するようになる。「批判」が相手への攻撃として捉えられがちな現状には、以上のような背景があるのではないだろうか。

同調と攻撃の間の中間領域が確保されにくく、「批判」という言葉が本来含んでいた「内容の吟味」、「物事に対する批評や判断」、「良し悪しや可否をめぐる議論と評価」といったものがおろそかになりがちな現状は、「炎上」という言葉の現在の用法にも通じているように思われる。

「炎上」はいま、各種のメディアで発信された誰か（特に有名人や公人）の言動に対して、ネット上で非難や誹謗中傷がサツトウすることを指す言葉ともなっている。問題は、当該の言動が筋の通ったものや正当なものであるうとも、逆に、筋の通らないものや不当なものであるうとも、どれも等しなみに「炎上」と呼ばれる、ということだ。ある差別を告発する勇氣ある発言をターゲットに、差別主義者たちが罵詈雑言を集中させることも「炎上」と呼ばれるし、とても看過できない酷い差別発言に

対して、その問題を指摘する真つ当な声が多く寄せられることも、同様に「炎上」と呼ばれる。そして、何であれ炎上してフォロワーが増えて良かった、チャンネルの登録者数やオンラインサロン<sup>注3</sup>の会員が増えて良かった、ということも平然と言われたりする。ここでは、火の手の大きさを、それにトモナう熱量の多さが、物事の真偽や正否や善悪に取って代わってしまっている。

マスメディアで頻繁に用いられている「賛否の声が上がっている」という類いの常套句も、問題になっている事柄の内容をさしあたり度外視して、熱量の上昇のみに言及できる便利な言葉だ。どちらかの道理に明らかに分がある場合にも、また、賛否どちらかの声の方が圧倒的に優勢である場合にも、「賛否の声が……」と表現しておけば、旗色を鮮明にせず済むし、自分の言葉に責任をもつ必要もなくなる、というわけだ。

②「炎上している」とか「賛否の声が上がっている」といった言葉によって物事をひとまとめにしてしまうのではなく、具体的な内容を「批判」する行為が、メディアでもそれ以外の場でも、もつと広範になされる必要がある。そして繰り返すならば、それは必ずしも否定的な行為だとは限らない。賛意を示すのであれ、あるいは難点を指摘するのであれ、人々がともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合っている場こそ、本来の意味で「批判」が行われている、建設的な議論の場なのである。

とはいえ、非難や攻撃と違って、批判は決して簡単な行為ではなく、私自身も日々試行錯誤しているというのが実情だ。どうすれば的を射た批判を展開できるのかという以前に、相手との人間関係がネックになる

ことも多い。というのも、批判をすれば、多少なりとも相手の気分を害したり傷つけたりすることは避けられないからである。だとすれば、批判は具体的にどう行うべきだろうか。

批判する際には言い方に気をつける、というのはシンプルだが、しかし、まずもって重要なポイントだろう。たとえ有益な内容の指摘であっても、不必要にきつい言葉や口調で語られては、感情的にとっても受け入れられなくなる。

また、内容という面ですぐに批判の典型は、相手の言葉尻だけを捕らえて自分の土俵（自分のセンモン分野、自分の経験など）に引きずり込み、その土俵上で相手を説き伏せる、というものだ。たとえば、「あなたはいま「無意識に……」と仰つたが、認知科学的には「無意識」とはこれこれこういうものであるから、「無意識」の問題として捉えるのは不適當だ」という風にして切り捨てるだけでは、相手がひどく気分を害するのも当然だ。そして何より、こうしたやりとりでは、問題に対して互いに理解を深め合うことも、別の見方を知ったり新しい見方を生み出したりすることも難しい。

逆に言えば、重要なのは相手の表現を尊重するということだ。具体的には、相手の言葉を十分なかたちで拾い上げ、それがどのような脈絡の下で発せられたのかをきちんと踏まえたうえで応答する、ということが必要だろう。批判を受ける側も、自分の言わんとすることをちゃんと聞いてもらい、それをよく理解してもらったうえで、納得できる問題点を指摘されるのであれば、苦い思いをしたり、多少傷つく部分はあるとし

ても、感謝する部分の方が多いだろう。

また、批判を行う側にとっても、相手の言葉をよく耳を傾け、それをよく理解しようと努めることは、自分には見えていないものの見方や馴染みのない考え方に触れ、学ぶ機会になる。そしてそれは、問題に対する理解を深め、解決の道を探る大事な手掛かりになりうるのである。

批判は、相手を言い負かす攻撃の類いではない。繰り返すなら、批判は相手とともに、問題を整理し、吟味し、理解を深め合うために行われるべきものだ。それゆえ、批判は、相手に真っ向から向き合うというよりも、言うなれば、お互いに少し斜めを向き、同じものを見つめ、そのものの様子や意味について語り合う、というイメージで捉える方が適當だろう。

そして、そのような場が成り立つための大前提として、私たちは自分の言葉に責任をもたなければならぬ。私たちが臆面もなく、「さっきの言葉はそういう意味で言ったんじゃない」といった言い抜けを繰り返したり、口に出した言葉を取り消そうとしたりするのであれば、(相手が発した言葉を真面目に受けとめ、よく理解しようとする)という営み自体が不可能になってしまうからだ。

(古田徹也『いつもの言葉を哲学する』より 一部中略)

(注)

- 1 画定する……………はっきりと定めること。
  - 2 等しなみに……………同じ扱いで。同様に。
  - 3 オンラインサロン……………ウェブ上で展開される月額会員制のコミュニティ。
  - 4 旗色……………立場。形勢。「旗色を鮮明にする」は主義・主張や態度を明らかにすること。
  - 5 ネット……………物事を進めるうえで支障となるもの。
  - 6 認知科学……………人間や動物の脳と心の働きなどを対象とする研究領域。
  - 7 臆面もなく……………遠慮することもなく。ずうずうしく。
- 問一 二重傍線部 a ～ d のカタカナを漢字で書きなさい。
- 問二 傍線部①「『批判』がこの国で常に否定的なニュアンスを帯びるようになった」とあるが、このような現状が生まれたのはなぜか。六十文字以内で書きなさい。

問三

A C にあてはまる語句として最も適当なものを、

それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 確かに
- イ ただし
- ウ なぜなら
- エ それで
- オ たとえば
- カ しかし

問四

傍線部②「『炎上している』とか『賛否の声が上がっている』と

あるが、筆者はこれらの言葉についてどのように考えているか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア フォロワーやチャンネルの登録者数などを増加させ儲けを増やす目的で、問題を指摘する声が多く寄せられることを期待し、わざと不適切な発信をして「炎上」させるのは問題外である。
- イ 正しく道理に合う非難や発言であっても「炎上」扱いされたり、「炎上」の規模や人々の熱意の大きさが、物事の正当性や善悪より重要視されたりするのは奇妙だが、現状では仕方がない。
- ウ マスメディアなどの公的な立場では、問題になっている事柄に対して、一個人のように賛成または反対の意を積極的に表すのは問題があるので、「賛否の声が……」という表現は適切だ。
- エ 問題になっている実際の物事や内容が正しいかどうかを棚上げして、世の中の興味、関心の大きさのみを表現した便利な言葉

だが、自分の意見を表明して責任をとることから逃げている。

オ 具体的な内容を精査することを無視した、物事の本質を捉えようとしない表現であり、これらの表現が多用される背景にある個人による発信における無責任な「批判」をやめるべきだ。

問五

本文の内容と合致するものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答順は不問とする。

- ア 「批判」にあたる欧語の由来は、物事を吟味して批評、評論するといった意味で、否定的な意味合いはもっていない。
- イ 日本の社会特有の相互的な「甘え」や「お約束」は、活発な議論や率直な批判を阻害し、前時代的な社会を作り出してきた。
- ウ 「炎上」は、対象となる言動の内容の吟味よりも、寄せられる声の多さや生み出された状況のもつ熱量を重視した言葉だ。
- エ 相手の主張に対する否定的な意見や疑問が強くなればなるほど、日本の社会全体を覆う同調圧力がますます強くなる傾向にある。
- オ 批判をする行為は相手との人間関係に影響を与えやすいので、試行錯誤して相手の気分を害さないようにすることが必要だ。
- カ 有意義な批判を行うことは、問題に対して相手と理解を深め合うことや、解決に向けた新しい見方や考え方の発見につながる。
- キ 批判は相手を言い負かしたり攻撃したりする勝負ではないので、相手に正々堂々と向き合い、正面からぶつかることが大切だ。

問六 次にあげる【文章B】と【文章A】の内容について説明した文と

して正しいものを、後のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【文章B】

かなり前の話なのでうる覚えだが、外国での長期滞在を終えて日本に帰ってきたばかりの人が、SNSに「久しぶりの日本の印象」を書き込んだことがあった。その中に「みんな日本人」のような文言があり、それに対して「確かにそれとおりだ」と共感する人びとと、「それは正しくない、日本にだって日本人じゃない人もたくさんいるのだ」と不快感を表す人びとがいた。

個人的には、「みんな日本人」と言った人の気持ちも分からなくはない。その人はおそらく、「道を歩けば多様な人種・国籍の人がいるのが一目瞭然りやぜんの国から帰ってきたら、日本はパツと見、そういう多様性がないように思えてしまう」ということを言おうとしたのだろう。「みんな」の範囲も、発言者の中では「日本に帰国してから自分が見かけた人たち全員」のつもりだったと思われる。それなのに、読み手の中に思いがけなく「日本に住んでいる人たち全員」と受け取る人びとがいて、そのうちの一部の人が気分を害したということかもしれない。

またこれとは別に、発言者が他人に「日本に住んでいる人たち全員」と解釈されることを承知の上で、あえて「みんな日本人」のような

言い方を選んだ、という可能性もある。その場合、発言者は、自分の本来の意図と実際の発言との間に見られる「ずれ」が、「冗談」という文脈によって埋められると思っていたはずだ。しかしながら、すべての人が「冗談が通じる文脈」の上にいるとは限らない。冗談が通じる文脈の見極めは、人びとの価値観が急激に変化しつつある昨今、とくに難しくなっているように感じられる。

家族や親しい人の間でならともかく、誰が見ているかも分からない場所で、思いつきをすぐ口に出すのは危険だ。自分の思っていることや感じていることには、意外と一貫性がなく、矛盾も多いものだ。私自身、炎上を極度に怖がるために、最近なかなかものが言えない状態おぼに陥おとっている。

川添愛かわぞえあい 『言語学パーリ・トゥード Round 1』

AIは「絶対に押すなよ」を理解できるか』より

ア 【文章A】は、同調圧力の強い日本において場の空気をつかんでトラブルを回避する能力が求められることを指摘しているが、【文章B】は、文脈の見極めが難しくなっている日本において、人びとの価値観の激変が起こりやすくなっていることを指摘している。

イ 【文章A】は、「炎上」という言葉が従来とは異なる意味で用いられる場面が多くなったことを指摘しているが、【文章B】は、価値観の激変する現代では「炎上」よりも「批判」と

いう言葉の方が本来の意味で用いられる機会が減ってきていることを指摘している。

ウ 【文章A】は、今日のコミュニケーションの場では、場の雰囲気<sup>かんい</sup>をみだすような和を欠いた発言はすべきではないと指摘しているが、【文章B】は、冗談<sup>きまつ</sup>がきちんと伝わるような文脈は昨今生まれにくくなっているので、曖昧<sup>あいまい</sup>な発言が減りつつあることを指摘している。

エ 【文章A】は、本来の意味での批判を成立させるために、自分の発言に責任をもたなければならぬと指摘しているが、【文章B】は、人の発言内容には自分が思っているほど一貫性がなく、矛盾も多いので、人前ではできる限り発言は控えるべきだと指摘している。

オ 【文章A】は、相手の言葉をしっかりと把握<sup>はあく</sup>し、どのような文脈で発言されたものなのかをきちんと踏まえたうえで応答することの必要性を指摘しているが、【文章B】は、人びとの価値観が激変している時代に、文脈を見極めることが難しくなっていることを指摘している。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈この場面までのあらすじ〉

小学二年生の玲は母方の祖父母の家に来ている。母の成美は両親との間にわだかまりがあり、実家には長く来ていない。

「玲、立春って知ってるか？」

おじいちゃんが言った。

「うん。一年のはじまりだよね？」

「お、よく知ってるな。若いのに」

「お母さんが教えてくれたから」

おばあちゃんとおじいちゃんが、ちらっと目を見かわした。

「うちでは毎年お祝いしてるのよ。昔から、すき焼きとお赤飯を食べる決まりだね」

「うちは、焼肉を食べに行くよ」

ぼくは甘辛い肉をかじった。やわらかくて、おいしい。

「立春に？」

「うん、当日じゃないけど。二月のはじめのほうの、土曜か日曜に」

近所の焼肉屋さんで、満腹になるまで食べまくる。叔父さんが一緒に

年も、ふたりだけの年もある。どっちにしてもお母さんはじゃんじゃん

注文する。食べきれないんじゃないかとぼくが言っても、聞き入れない。

日頃は慎重なわりに、ときたま強気になるのだ。お店を出るときには、

立ちあがるのがしんどいくらいにおなかを重たくなっている。

お祝いなんだからばあつといかなきゃ、というのがお母さんの言い分  
で、それでぼくも立春の由来を知ったのだった。

「そう……焼肉……」

おばあちゃんが目をふせた。

ぼくはひやりとした。もしかして、よけいなことを言っただろうか。

長年守ってきたルールを勝手に変えられて、気を悪くしたかもしれない。

「あの、ごめんなさい。ほんとはすき焼きを食べるんだって、ぼく知らなくて」

言ってしまったから、まずい、とまたもやあせる。これじゃ理由にな  
ってない。ぼくが知らなかったって、お母さんはちゃんと知っていたはずだ。

顔がひりひり熱い。どうしたらいいのかわからなくなって、取り皿の  
底に沈んだ肉のかけらをお箸でつつく。うちにはすき焼き鍋もない、と

いうのは言い訳になるだろうかと考えていたら、

「いいでしょう、どっちでも」

と、ひいおじいちゃんがぼそりと言った。

「どっちも、肉だ」

「だな」

おじいちゃんがぶつとふきだした。

「大事なものは、祝おうっていう気持ちだもんな？」

テーブルの上でおばあちゃんの手に自分の手を重ねたのが、ぼくからも見えた。うつむいていたおばあちゃんが顔を上げ、ぼくにっこり笑



いかけた。

「成美も……お母さんも、忘れないでお祝いしてくれてたのね」

「そもそもうちだって、全部が全部、昔のままってわけでもないしな」

おじいちゃんが言う。以前は、子どもたちにプレゼントをあげるという習慣もあったそうだ。うらやましい。

「年寄りだけじゃ、どうもなあ。クリスマスなんかも、子どもらが小さい頃は気合が入ったもんだけど」

「ね。だけど今年は、玲くんになにか用意しておけばよかった」

「ああ、そうだな。ごめんな、気が回らなくて」

「いいよ」

ぼくはあわてて首を横に振った。

「ひいおじいちゃんに、メモ帳を買ってもらったし」

「へえ、父さんが？」

ひいおじいちゃんはもぐもぐと口を動かしつつ、浅くうなずいた。口の中に食べものが入っているせいで返事ができないのかと思ったら、また次の肉をほおばっている。特に説明する気はないようだ。

「あと、長靴も」

さっき家に帰ってきて、玄関で長靴を脱いでいるときに、「よかったら、これからも使って下さい」とひいおじいちゃんが言ってくれたのだった。「持って帰ってもいいし、とりあえずここに置いておいてもいいし」

少し考えて、ぼくは答えた。

「じゃあ、置いときます」

うちにはぴったりのサイズの長靴が一足ある。それに、ここに置いておけば、次に来たときもまたこれをはいてひいおじいちゃんと散歩ができるだろう。左右をそろえ、ひいおじいちゃんをまねて、靴箱の手前に置いてみた。大きな深緑と、小さな青。並んだ二足は、サイズのせいか親子っぽく見えた。

「長靴？ 玲に？」

おじいちゃんが首をかしげたとき、どこかで聞き慣れない電子音が響き出した。

「あら、電話」

おばあちゃんが立ちあがった。壁際の棚に置かれた電話機のボタンが、ちかちか点滅していた。

電話をとったおばあちゃんは、こつちを振り向いた。

「玲くん、お母さんよ」

ぼくが受話器を耳にあてるなり、「玲、大丈夫？」とお母さんはせかせか言った。

「大丈夫だよ」

「そう、よかった」

ふうつと息を吐く音が、耳もとに吹きかけられた。

「電話、どうして出ないの。何度もかけたのに」

「あ」

リュックに入れたまま、部屋に置きっぱなしだ。

「ごめん、忘れてた」

「まあ、そんなことだろうと思っただけ。どう、そっちは？ 順調？」

「うん。順調」

昼間と同じ返事が、昼間より自然に、口から出た。すぐそばに立っているおばあちゃんと目が合った。

「おばあちゃんにかわるね」

お母さんがなにか言う前に、ぼくは急いで受話器を引き渡した。

「もしもし？」

おばあちゃんは両手で受話器をぎゅつと握りしめている。

「うん、いい子にしてる……ううん、とんでもない……」

おじいちゃんも席を立て、ぼくたちのほうに③いそいそと寄ってきた。片手でおばあちゃんのひじをつつき、もう片方の手で自分の胸を指さしている。

「ちようどすき焼きを食べてたところ……そうそう、立春だから」

ぼくは食卓に戻った。

ひとり残ったひいおじいちゃんが、おかわりをよそっている。豆腐やねぎはよけて、牛肉だけを器用につまみあげていく。迷いのない手つきを見ていたら、ぼくも急に食欲がわいてきた。よく考えたら、まだそんなに食べてない。

お箸をとり直したぼくに、ひいおじいちゃんが突然言った。

「今度、あなたのお母さんも連れていらっっしゃい」

「ぼくが？」

聞き返したのは、逆じゃないかと思ったからだ。ぼくが、お母さんを

連れてくる？ お母さんが、ぼくを連れてくるんじゃないか？

「はい。あなたが」

ひいおじいちゃんはまじめな顔で即答した。ぼくもつられて、まじめに応えた。

「わかりました。連れてきます」

「よろしく頼みます」

後で、メモ帳に書いておこう。お母さんに話したいことがいっぱいあるから、うっかり忘れてしまわないように。

おばあちゃんがほがらかな笑い声を上げた。おじいちゃんは受話器の反対側に耳をくつつけて、会話を聞きとろうとしている。ぼくはお尻を浮かせ、鍋をのぞいた。あたたかい湯気があたって、おでことほつべたがじんわりと汗ばんだ。

ふと、ひいおじいちゃんが立ちあがった。窓辺に近づき、真っ白く曇ったガラス戸をゆっくりと開け放つ。

涼しい風がさあつと吹きこんできた。すっきりと澄んだ冷たい空気を、ぼくは胸いっぱい吸いこんだ。雨はもう上がったようだ。ひいおじいちゃんの頭上に広がる夜空に、細い月が静かに光っている。

(注) (瀧羽麻子『博士の長靴』より)

(注)

1 叔父さん………母の弟。

問一 二重傍線部 a、c の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「取り皿の底に沈んだ肉のかけらをお箸でつつく」とあるが、この時の玲の気持ちをも、「ルール」という言葉を使って、七十字以内で書きなさい。

問三 傍線部②「気が回らなくて」、傍線部③「いそいそと」の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア、オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

②「気が回らなくて」

- ア たいして役に立たず
- イ 相手の気持ちに鈍感で
- ウ 注意が不足している
- エ 配慮が足りなくて
- オ 何も思いつかなくて

③「いそいそと」

- ア 喜び勇んで
- イ 落ち着いて堂々と
- ウ 焦って大急ぎで
- エ そそくさと慌てて
- オ 面倒くさそうに

問四 本文中から読み取れる玲の様子についての説明として最も適当なものを、次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ひいおじいちゃんとの散歩を子どもらしく喜びつつも、繊細な気遣いと的確な言動で身内の問題を解決しようとしている。
- イ 周囲の状況を瞬時に把握する洞察力をもつが、落ち着きがなく気分が変わりやすいという子どもらしさも併せもっている。
- ウ 年齢よりも大人びた考えをもち、家族関係がうまくいくように周りの人のことをよく観察して、母のことを第一に考えている。
- エ 母と祖父のデリケートな関係を理解しながら、関わるのが嫌であえて気づいていないように無邪気に振る舞っている。
- オ 母と祖父母との関係には敏感になりつつも、ひいおじいちゃんには素直に親しみを感じ、今後の交流を期待している。

問五 本文中から読み取れるひいおじいちゃんの人物像として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の本心をあかさず、言葉が足りないせいで他人に誤解を与えることもあるが、玲の母のことを誰だれよりも心配するなど、熱い感情を秘めた人物。

イ 家族のことには口を出さず、常にマイペースな態度には息子からあきれられているが、玲のことを思いやるなど本来は慈愛にあふれた人物。

ウ 口数は少なくマイペースだが、母のことで気をやむ玲のことを気にかけて、家族の関係が良好になることを望んでいるような情に厚い人物。

エ 自分から積極的に発言するような性格ではないが、母のことで落ち込んでいる玲のことをなんとかしてあげたいと思いい悩む情にもろい人物。

オ 家族の先頭に立って行動するような性格ではないが、息子夫婦と玲の母との関係が改善するようにこっそりと根回しするような抜け目のない人物。

問六 この文章における表現の特徴について説明した文として最も適当なものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答順は不問とする。

ア 大人たちの心情を丁寧ていねいに描くことで、主人公に温かく接しようとする大人たちの素朴そぼくで不器用な人柄が強調されている。

イ 登場人物たちの会話の場面が小説の中心にすえられ、出来事や状況が会話の中でも示されて、物語が展開している。

ウ 「……」を用いて登場人物の言動を描くことで、主人公が大人の本心を感じ覚的に感じとり円滑に導いたことを示唆しきしている。

エ 小学生の目線による、情報量を最低限に省いた語り口が、かえって読み手の興味を引く、神秘的で謎なぞの多い展開になっている。

オ お互いへの愛情が溢あふれるやり取りを、比喩ひゆ表現を多用して情感豊かに描き、読み手に家族の絆きずなの素晴らしさを訴えている。

カ 緊張感のある会話の連続で、人間関係が希薄なリアルな現代の家族の風景を鮮やかに描き、問題点を浮き彫りにしている。

キ 母と祖父母の関係が今後好転していくことが、文章の終わりの、雨が上がり、涼しい風が吹き込む描写に暗示されている。

問題は次のページに続きます。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先日、仕事でドイツに行った時に、新聞でこんな記事を目にしました。タイトルは『デモクラシーVSテンポクラシー』。デモクラシーとはご存じのとおり、民主主義です。テンポクラシーは記事を書いた人の造語ですが、「テンポ」は「速さ」を意味しますから、「速さ主義」「時間主義」と訳するのがいいでしょうか。つまり速さや効率による社会の支配を意味してつくられた言葉です。

どんな内容だったかというところ、民主主義という時間にかかる政治システムに対して、現代社会はIT化が進み、スピードが<sup>①</sup>どんどん速くなっている。そのため、政治と政治以外のシステムの動きに大きな差が生じている、というものでした。

これはドイツにかぎったことではなく、全世界で起こっていることです。例えば、Aした株式投資においては、1秒判断が遅かっただけで、巨大な損失を出しかねない。逆に1秒速ければ、a大きな利益につながる可能性もある。投資家たちは、まさに<sup>②</sup>生き馬の目を抜くような世界を生きています。

一方、民主主義はそうはいきません。多くの人たちの意見を反映させるためには<sup>b</sup>さまざまな角度からの議論が必要で、決定には長い時間がかかります。しかし<sup>注1</sup>一刻を争う市場にとって、それは百害あって一利なしです。ですから<sup>注1</sup>ブラックユーモアのようですが、IT社会において、議論する人間はダメな人間だと。デモクラシーは、最大の非効率であり、

最大のお荷物になってしまったわけです。

そしてIT化社会のスピードに合わせて政治決定も速くやるべきだという声が、日々大きくなっています。本来、マーケットとデモクラシーはまったく別ものだったはずですが、政治にとつても今や最も<sup>c</sup>大切な効率である。民主主義の名のもとに、よくわからない議論が延々と続くよりも速やかに日銀の金利を上げたり、国債を発行したり、まるで機械のスイッチを入れるようにスピーディに政治的決定ができるほうが賢いやり方であるというわけです。民主主義的な議論や手続きなんて必要ないからテンポクラシーでいこうと。そういう方向に今、社会は大きく動きつつあります。

そこで登場するのが、ある種のリーダー待望論です。強いリーダーにすべてをまかせてしまえば、速い意思決定が可能だからです。議員も立法府も議会もなくていい。もしかしたら有権者もいらない。誰かに<sup>d</sup>全部まかせて、ボタンを押してもらおうと。だからどこかの首長のような独裁者を望む声が大きくなっているのです。

しかしこれはとても危険な<sup>d</sup>ことです。古代民主主義から始まり、約2000年の政治の歴史の中でデモクラシーは<sup>e</sup>培われてきました。時間をかけて熟議し、対話することで、少数派の意見を取り入れたり、弱者の立場を守ったりすることができたのです。しかし政治がマーケット化していけば、Bのもとに、それらはすべて切り捨てられてしまうでしょう。

また現実問題として、市場がつけつける困難な問題を解決する能力を独裁者はもっていません。そして解決能力がないことを隠すために一方

で強力なドラマツルギーを演じ、その問題をほかのことに転嫁させようとするのが歴史の常です。<sup>注2</sup>

例えばよくあるのが問題をナシヨナリズムに転嫁させていくというパターンです。ナシヨナリズムは非常に手っ取り早くて誰からも文句を言われず、なおかつ自分がヒーローになれるからです。彼ら独裁者は一見強く見えますが、それは自分が解決できない大切な問題を硬い鎧の下に隠しているからにすぎないのです。

(姜尚中『それでも生きていく 不安社会を読み解く知のことば』より)

(注)

1 ブラックユーモア……背後に皮肉や不気味さを感じさせる笑いのこと。風刺的な内容の笑が多い。

2 ドラマツルギー……ここでは周囲が個人に期待する役割のこと。

問一 傍線部①「どんどん」・傍線部③「ない」の品詞名を、それぞれ漢字で書きなさい。

問二 A・B にあてはまる言葉として最も適当なものを、

それぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 効率化    イ 定型化    ウ グローバル化

エ 正当化    オ 多角化

問三 二重傍線部 a～d の中で、文法的性質が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部②「生き馬の目を抜く」の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 社会情勢に応じて慎重に判断する
- イ 相手をだまして利用しようとする
- ウ とても危険な状況に身を投じる
- エ 利益につながる機会を嗅ぎ取る
- オ 素早く抜け目のない行動をする

問五 波線部「百害あって一利なし」とあるが、あなたはどのようなことを「百害あって一利なし」と感じるか。「……は、……という点で百害あって一利なしである。」という文の形で、具体的に七十字以内で述べなさい。